



②大正三年・浅間山の噴火のようす

火山の噴火により、火口から大量の火山灰が噴出された。火山灰は軽いので、上空の風によって遠方に運ばれた。



③榎戸小富遺跡のローム層

発掘調査の結果、厚さ約1.5mのローム層（赤土）が確認された。おもに、古富士火山（古い時期の富士山）の火山灰でできあがっている。

①キャンプのようす

これが旧石器時代の暮らしのイメージだ。約2万年前の最も寒い時期には、気温が現在よりも年平均で6～8℃低く、北海道の十勝平野に近い冷温帯気候となっていた。台地上は草原で木々が点在し、その一角で、複数の家族が集団で狩りの合間のひと時をすごしている。住まいは頻繁な移動生活のために簡単なつくりのテント。たき火の周りでは調理や石器製作、手前では毛皮製作が行われている。遠方では火山が盛んに噴煙を上げている。谷あいでは、河川に沿って樹木が帯状に連なり、人々に森の恵みをもたらしている。



氷河期に生きた人々——狩猟採集の生活——

⑤ナウマンゾウの復元像

肩の高さ：約2.8m
全長：約6m



⑥オオツノジカの復元像

肩の高さ：約1.7m



④針葉樹林の森（北海道）

十勝平野の西に連なる日高山脈の針葉樹林帯。落葉広葉樹が少ない。おそらく2万年前の八街も、このような植生だったのであろう。

動物の習性を知り尽くした上で移動の時期や経路を決め、一定の範囲を計画的に移動していたようです。

この時代の遺跡は、小河川に沿った台地の縁に立地しています。その理由は、この場所が飲料水や食料の確保に都合が良いからです。

世界各地の狩猟採集民の研究や石器の研究から、人々は数家族からなる十～二十人以内の集団を構成しており、食料の確保のために移動を繰り返し、同じ場所に長期間とどまることはなかったものと考えられています。ただし、むやみに移動するのではなく、木の実の収穫時期や場所、狩猟対象

寒冷な氷河期（ひやうが）を生き抜いた旧石器時代人は、狩猟採集民（しやうりようさいしゅうみん）でした。石器で狩猟具を作り、ナウマンゾウ（⑤）やオオツノジカ（⑥）などの獲物（えもの）を狩り、クリ、クルミ、ヤマブドウなどのさまざまな木の実を採集していました。

当時の人々が生活していた台地上は草原で、台地の斜面から谷にかけては、主に針葉樹（ようじゆ）の森（④）になっていました。ここには落葉広葉樹（らくようこうようじゆ）やツル植物が混じり合い、クリやクルミをはじめ多数の食用植物がみられました。